



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	二格の起点用法について : 指向性からの説明( fulltext )
Author(s)	岡,智之
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 63(2): 321-331
Issue Date	2012-02-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/127950">http://hdl.handle.net/2309/127950</a>
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

## 二格の起点用法について

—— 指向性からの説明 ——

岡 智 之\*

留学生センター

(2011年9月28日受理)

### 1. はじめに

本稿の目的は、日本語の格助詞「に」(以下二格)の用法のうち、起点用法と呼ばれる用法について、指向性の観点から説明を与えようとするものである。

起点用法と呼ばれるのは、次のような用法である。

- (1) 次郎は太郎に本をもらった。(もらい手)
- (2) 太郎は花子にたたかれた。(受身の「動作主」)
- (3) 職員の横柄な態度に腹を立てる。(原因・起因)

これらの用法は、「太郎が学校に行く」などの着点用法に対して、起点用法と呼ぶ。「太郎が次郎に本をあげた」では二格は授与の相手で、移動物(「本」)の移動する着点が「次郎」なのに対し、「太郎」は移動物が移動する起点と解釈される。(1)はその起点に二格が使われているのである。「花子が太郎をたたいた」という能動文では、エネルギー伝達の流れでは、動作主(「花子」)が起点となり、非動作主(「太郎」)は着点となる。(2)の受け身文は、起点である動作主に二格が使われている。また、(3)の原因は、原因→結果という方向性からすると、原因が起点になり、結果が着点と解釈される。

本稿は、このような起点の二格に対して、二格のスキーマから意味的説明を与え、二格の意味用法の統一した説明を与えたいと考える。

### 2. 先行研究

従来の研究では、二格のプロトタイプもしくはス

キーマを着点としたために、起点用法がうまく説明できないという難点があった。たとえば、菅井(2005)では、「起点・過程・着点」のスキーマを元に、起点はカラ格が、過程はヲ格が、そして着点は二格が具現化するものとした。そして、着点としての二格は、ガ格から二格への一方向的な移動や働きかけがあるとされている。しかし、「次郎が太郎に本をもらった」では、移動物「本」は二格(「太郎」)からガ格(「次郎」)に移動するのであって、ガ格(次郎)が二格(太郎)に何らかの働きかけをしたとは限らないのである。

- (4) 次郎は太郎に思いがけず本をもらった。

(4)では、次郎が太郎になんらかの働きかけ(求めという行為)をしたわけではないであろう。

また、受け身の動作主では、二格(「花子」)がガ格(「太郎」)に働きかけをしているのであって、その逆ではない。

二格のスキーマをガ格から二格への移動や働きかけであるという説明では、起点の二格はうまく説明できないのである。

一方、竹林(2007)は、「視線の移動」という概念を導入して、「に」のスキーマの意味を<移動主体が、一方から他方へと移動し、対象に密着する>と規定した。すなわち、受け身文の動作主用法では、視線が被影響者から動作主へ移動する、受益構文では、受益者から与益者に視線が移動するというものである。しかし、竹林の規定の「移動主体」が移動するという表現は誤解を生むものである。「次郎は太郎に本をもらった」で、次郎が太郎に視線の移動を行っているという

\* 東京学芸大学 留学生センター (184-8501 小金井市貫井北町 4-1-1)

説明は納得できるが、ここでの移動主体は「本」ではないか。(そもそも視線そのものが移動主体であるという言い方が理解しにくい。) また「部屋にいる」のような「存在の場所」用法では、<移動主体が対象物に密着している>という側面が焦点化されているとしているが、存在の場所表現では、移動そのものがないのであって、移動主体は存在しないのである。「移動」という概念にこだわるとこういう問題性が出てくる。

### 3. 本稿の観点—指向性

本稿では、二格のスキーマを、二格名詞句に向かった指向性と位置づける。指向性とは、認知主体がある対象に向けて、心的走査をおこなうことで、端的に言えば、「あれ」と指さしすることである<sup>1)</sup>。(図では対象に向けた点線の矢印で表される) 移動の着点では、ガ格の移動主体に視点を置き、そこから着点二格を指向する。(着点では移動の方向性と指向性の方向性が一致する。) 多くはガ格→二格の指向性を持つが、存在の場所では、逆にまず場所の二格に指向性が向けられ、そこからガ格の存在物にアクセスされるという参照点構造を持つのである。そういう意味で、二格の最もスキーマ的な意味は、二格名詞句に向けた指向性であると規定することが出来るのである。

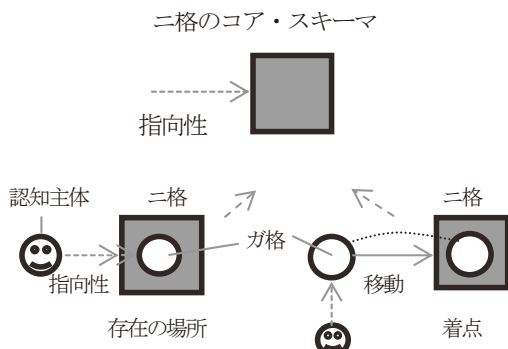


図1 二格のスキーマ

### 4. 授受動詞の起点用法

それでは、まず、授受動詞のあげ手ともらい手を表す二について論じていきたい。まず、授与の相手(もらい手)は、移動の着点の拡張として解釈できるであろう。すなわち、授受関係におけるあげ手=起点、もらい手=着点であるから、起点から着点へのモノの移動として授受関係は規定できる。

(5) 太郎が次郎に本をあげた。

(太郎→次郎 モノの移動, 指向性)

(6) 次郎が太郎に本をもらった。

(次郎→太郎 指向性)

(5) のもらい手が二格を表す場合では、太郎から次郎に本が移動し、次郎のもとに本があることを示している。ここでは、モノの移動の方向性とガ格から二格への指向性は一致している。

一方、(6) のあげ手が二格を表す用法では、先に着点として表された二格名詞が起点を表しているという点が問題となる。「太郎が次郎に本をあげた」という同じ事実を次郎の視点から述べると「次郎が太郎から本をもらった」のように、太郎は起点をあらわすカラ格で標示されるのが自然であるが、なぜここで起点が二格で表されているのであろうか。

菅井(2007:123)では、「[着点]の与格は、主格NPから着点NPへの順方向的なエネルギー伝達が《到達性》を満たしていることを表し、[起点]の与格は、順方向的な着点NPへの《到達性》を前提に、その[着点]を[起点]として逆方向に汎用したもの」であるとしている。

まず、「起点」の与格が「着点」の与格を前提としているという指摘は、「太郎が次郎に本をあげた」という関係を前提として、「次郎が太郎に本をもらった」という関係が成り立つという意味で支持できる。ここから、次例で「太郎が図書館に本を借りた」がなぜ成り立たないか説明できるだろう。

(7) 太郎は図書館から/\*に本を借りた。

(\*図書館が太郎に本を貸した。)

(8) 彼は警察から/?に感謝状をもらった。

(?警察が彼に感謝状をあげた。)

すなわち、(7)では、前提となる「図書館が太郎に本を貸した。」が成り立たないからということになる。 (8)で二格の容認性が若干上がるのは、「警察が彼に感謝状をあげた」の「警察」が擬人的に動作主として解釈される余地があるからであろう。

菅井(2007)の問題性は、起点NPが「二格」で標示されるときは、起点NPに対する順方向的な働きかけが含まれているとしている点である。「花子が先輩に携帯電話を借りた」では、主格NP「花子」が「先輩」に「借りる」ことを求めたことが前提となっているとしている。そして、(7)の二格が不自然となるのは、「図書館」が図書館の閲覧・保管・貸し出しを役割とする公共機関であって、あえて「図書館」に「働きかけ」をする必要がないためとしている。しかし、こ

これはアドホックな説明であろう。「図書館」で本を借りる際にも、貸し出し受付で本を出すとか、機械で貸し出し手続きをするという働きかけはあり得るであろう。「借りる」という動詞の性質上、なんらかの働きかけは不可欠である以上、「借りる」の場合、二格名詞句に働きかけがあるということは認められるだろう。しかし、「私は花子に思いがけずプレゼントをもらった」では、「私」が「花子」にプレゼントを求めるといふ働きかけが前提になっているとは、やはり認めがたいのである。

一方、竹林 (2007) は、菅井に対する批判を共有しつつ、

(9) 太郎は (さんざん頼んで) 友達にゲームを貸してもらった。

(10) 太郎は、隣のおじさんに、思わぬ褒め言葉をかけてもらった。

(9) の場合は、「依頼」が一方から他方へとなされている、すなわち「依頼内容の移動」を表す「依頼使役文」だが、(10) の場合は、「依頼使役文」ではなく、視線が一方 (主部項目 [受益者]) から他方 (「に」格項目 [与益者]) へと移動する、すなわち、言表者 (話し手/書き手) が受益者の側に立って、与益者を対者として設定するということである、としている。

この指摘は基本的に支持できるものである。ただし、「視線の移動」という規定については、一定の留保をしておきたい。受益表現の、「次郎が太郎に本をもらった」では、認知主体の視点が「次郎」に置かれ、そこから「太郎」に向かっている視線が移動していると解釈することは可能であろう。しかし、2で述べたように、そこから「に」のスキーマの意味を、<移動主体が、一方から他方へ移動し、対象に密着する>と規定するのは問題がある。これは「図書館に着く」のような移動の着点用法にはそのまま当てはまるが、「次郎が太郎に本をもらった」では、移動主体は「本」であって、視線ではない。また、視線そのものが主体として動くわけではないだろう。視線は移動主体ではなく、移動させているのは認知主体である。そういう意味で、本稿では、これを視線の移動というより、認知主体の指向性として規定する。認知主体は、受益者に視点を置いて、その立場から与益者を指示する。このとき、受益者の与益者に対する感謝などの気持ちが含まれる。それゆえ、与益者が有情者 (典型的には人間) であることが普通である。

結論として、授受表現において、モノの移動としては起点から着点への方向性があるのであるが、二格があらわしているのは、次郎から太郎に向かう心的走査の方向性 (指向性) なのである。起点用法では、移動の方向性 (ニ→ガ) と指向性 (ガ→ニ) が逆になっている点に注意しなければならない。

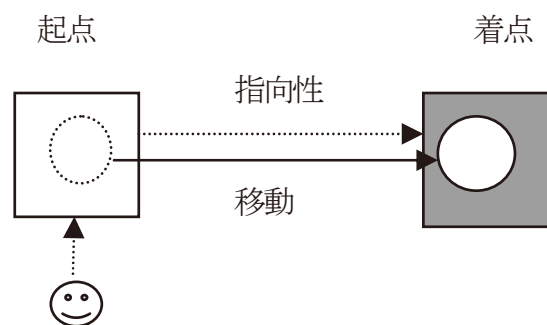


図2 授受の相手 (着点)

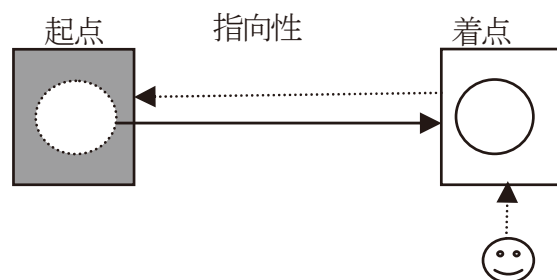


図3 授受の出所 (起点)

結局、授受の出所用法の二格は、モノの移動の方向性というより、認知主体がまず視点を置くガ格から二格への指向性という二格のスキーマが顕在化したものと解釈できるだろう。

## 5. 受身における二格

### 5. 1 受身の二格の認知過程

先に言及したように、受身の「動作主」を表すとされる二格は、菅井 (2005, 2007) のように、ガ格名詞から二格名詞への働きかけがあるとは考えにくい。(次郎が太郎に頼んでたたかれる, というような事態は普通考えにくいだろう。) (12) の受身文では、むしろ二格名詞 (太郎) からガ格名詞 (次郎) への働きかけがあると見るのが自然である。

(11) 太郎が次郎をたたいた。(働きかけ ガ→ヲ)

(12) 次郎が太郎にたたかれた。(働きかけ ニ→ガ)

動作主とは、エネルギー伝達の起点であり、被動作主は、エネルギー伝達の着点とするならば、まず、前項の授受の出所の説明のように、被動作主から動作主への指向性があるという説明が出来るだろう。直接受身では能動文の被動作主に視点が置かれて、ガ格として表され、動作主は二格となる。このとき、被動作主から動作主に向けて走る指向性があると考えられる。

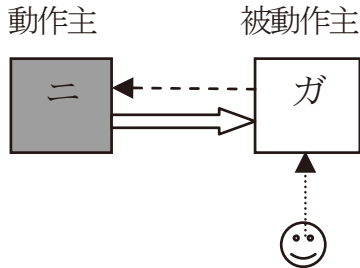


図4 直接受身の動作主の二格

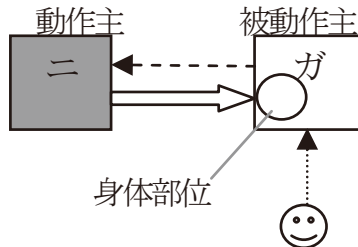


図5 持ち主の受身の動作主の二格

また、いわゆる持ち主の受身は図5のような図式になる。

- (13) a. (私は) 隣の人に足を踏まれた。  
 b. \* (私の) 足が隣の人に踏まれた。  
 (14) a. (私は) 母に日記を読まれた。  
 b. \* (私の) 日記が母に読まれた。

この場合、身体部位や持ち物がガ格に立ち得ないのは、ガ格名詞がモノ（非情物）の場合、認知主体がその立場に立って動作主を指向するということが困難だと説明できるだろう<sup>3</sup>。持ち主の受身の主体は典型的には「私」である。

次に、間接受身の場合はどうだろうか。間接受身の二格はガ格名詞に働きかける直接的参与者ではないし、明らかに動作主とは考えられない。また、二格名詞はガ格名詞に必ずしも「密着」していない。

- (15) 太郎は雨に降られて、ずぶぬれになった。  
 (16) 花子は両親に死なれて、苦難の人生を歩んだ。

- (17) 花子は赤ちゃんに泣かれて、困った。

間接受身では、ある事態があり（「赤ちゃんが泣く」）、それ自体が直接的に被影響者に働きかけるものではないが、間接的に何か影響を与えていることが二重矢印が点線になっていることで表されており、非影響者は、何らかの変化を被っている（普通迷惑のニュアンス）。二格は、被影響者から事態の中核である二格参与者に対する指向性を表している。

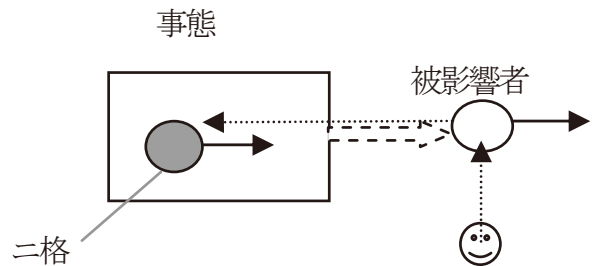


図6 間接受身の二格

上記のような受身の被影響者は、有情者である。しかし、いわゆる受身の「主語」が非情物になる場合がある。これはどう説明すればいいのか。次の例文では、ガ格名詞が二格名詞に包含される関係が見られる。つまり、ここでは二格名詞が「場所」として解釈されるわけである。このような受身を「場所受身」と呼びたい。

- (18) 富士山の頂上は万年雪におおわれている。  
 (富士山の頂上C万年雪)  
 (19) その家は高い塀に囲まれている。(家C塀)  
 (20) レモンにはビタミンCがたくさん含まれている。  
 (ビタミンC Cレモン)

(18) においては、「万年雪が富士山の頂上を覆っている」という能動文が受身化されたものとして、万年雪が比喩的に（動作主的に）富士山の頂上に働きかけているという解釈がされるかもしれないが、このような受身文において、万年雪は動作主より場所として解釈したほうが自然である。((18) (19) の場合、場所のデにも置き換えられるだろう)。この場合、二格もガ格も非情物であるが、認知主体の指向性が場所の二格に向かい、ガ格の存在物を指し示すという存在のスキーマの構図を継承していると考えられる。位置づけられる存在物が主題化される場合は、存在物から二格に指向性が向けられる参照点構造となる。

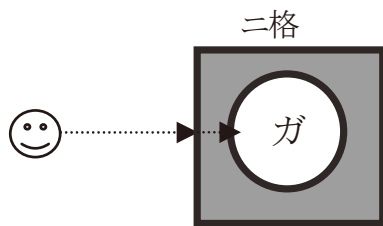


図7 「場所受身」の二格

- (21) 窓際に花が飾られている。
- (22) 旗が風に吹かれている。
- (23) 新宿は多くの乗客に利用されている。

このような場所の受身は、「窓際に花が飾られている」のように、「場所に対象物が何らかの状態で存在している」ことを描写する存在文と連続するものである。

また、「旗が風に吹かれている。」のような受身は、「風が旗に吹いている」という能動文（やや不自然であるが）が考えられ、風が旗に影響を与えているようであるが、風は動作主とは考えにくい。これも広義には、「風の中に旗がある」という関係で二格が場所的に解釈され、ガ格が位置づけられる場所受身の変種であると考えられる。このニは、「旗が風になびいている」のような原因と解釈される二格と共通性を持つものである。「祖父は不治の病に冒されている」は有情物主体であるが、同質のものである。

「新宿駅は多くの乗客に利用されている」では、二格が有情者であるが、「新宿駅は、太郎に利用されている」というような文は不自然である。これは、複数主体や多回的な動作を表すことによって、場所的な解釈が持ちやすくなるからだろうか。「地震の影響で、新宿駅は、多数の乗客に埋め尽くされた」の場合、多数の乗客が場所的に解釈されている。これは、「頂上は雪に覆われている」のような受身の認知過程を継承しているものと考えられる。また、「この本は、多くの人に読まれている」のような例は、複数主体が同じものに働きかける（「読む、利用する」）ことによって、多くの人に囲まれているようなニュアンスを

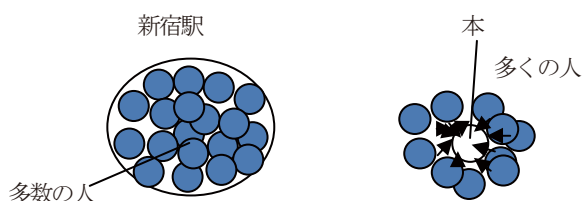


図8 複数主体が場所的に解釈される場合

与えている。「城は多数の軍勢に囲まれた」のような受身と同様の認知過程を継承していると解釈したい<sup>5</sup>。

以上、直接受身、間接受身、持ち主の受身のような有情者が何らかの影響を受け、動作主体に指向性を送るといような受身と、二格が場所的に解釈され、ガ格に位置づけられるという場所受身という受身の種類を提案した。

## 5.2 受身のニとカラ、ニヨツテの違い

それでは、受身の「動作主」を表すマーカーとしてニ他にカラ、ニヨツテがあげられるが、これらとの違いを説明することによって、受身の二格の意味的特性を考えてみたい。

まず、カラ格の受身について述べる。日本語記述文法研究会編（2009：224）では、「直接受け身文によって表される動きや状態に、具体的あるいは抽象的な移動や方向性が含意されているとき、能動主体はその起点として解釈され、「から」によって表される。」としている。

- (24) 優勝者には主催者 から/\*に メダルが贈られた。
- (25) 妹が車で見知らぬ人 からに 声をかけられた。
- (26) 高校時代の友人 からに 結婚式に招待された。
- (27) 佐藤さんは両親 からに 深く愛されている。

(24) は、具体的なもののやりとりを伴う移動で、この場合受益者の二格（「優勝者に」）と二格が重複するため、二格は使えない。(25) (26) は言語活動を表す動詞で、メッセージが移動するといった動きが想定される。また、(27) は、感情など心的活動・態度を表す動詞で、人から人への心の働きといった抽象的な移動が想定できるので、カラ格が使えるとしている。カラ格が使える場合は、ほぼ二格が使える。

森（1997）では、そのような何らかの移動が感じられず、二格とガ格の隣接性、一体化が強まるにつれ、カラ格が使えなくなる、としている。

- (28) 電車で隣の人 ?からに よりかかられた。
- (29) 犯人は警察官 ?からに 縛られた。
- (30) 留守番の主婦が強盗 \*からに 殺された。
- (31) 富士山の頂上は万年雪 に/\*から おおわ

れている。

(28) ~ (29) のように移動のニュアンスがなくなり、二格名詞とガ格名詞の隣接性(密着性)が高くなってくるとカラ格は使いにくくなり、(31)のようにガ格が二格に一体化するあるいは包含されるという場所の受身は二格しか使えなくなる。また、間接受身は移動そのものがないのであるから使えないのは自明であろう。

次に、ニヨッテとの意味的違いについて述べる。

日本語記述文法研究会編(2009:223)では、「[によって]は、動作の主体や原因的な意味を持つ能動主体を表す、ややかたい文体で用いられる形式である。」としている。

- (32) 議長 によって /\*に 国際会議の開会が宣言された。  
 (33) 整備不良 によって /\*に で 引き起こされる事故が年々増加している。

(32) の例では、「議長が国際会議の開会を宣言した。」という能動文の対象はそもそも動作主が働きかける対象というものではない。その受身文である「国際会議の開会が宣言された」のガ格(国際会議の開会)は、非影響者ではないという意味で直接受身ではないのである。そもそも影響を受けるのは有情者(典型的には人)であって「国際会議の開会」は、有情者ではなく、出来事である。このような出来事の視点に立って、動作主に指向性を発すると言うことが不自然であることが二格が使われない本質的な理由と説明される。また、「議長に国際会議の開会が宣言される」とすると、二格が「議長に対して」の意味に解釈されてしまうから二格が避けられるという理由もある。(33) の例で、二格が使えないのは、「事故が引き起こされる」という受身文のガ格は、出来事であって、出来事からその動作主に指向性が発せられるという説明が出来ないという同様の理由による。

それでは、なぜ「によって」が使われるのか。もともと「よる」が「因る」と表記され、「病気による欠席」「濃霧による欠航」「成功は市民の協力による。」などと言われるように、本来的に出来事を引き起こすもとなる起因を表す動詞であり、「によって」は、出来事の起因を表すもっとも適当な複合辞になるからである<sup>6</sup>。

また、「動作や行為の結果、何かが生まれてくると

いった意味を表す産出動詞では、能動主体を明示する場合に、「に」を用いることが出来ず、「によって」で表す(同2009)とされるが、なぜ、産出動詞においては、ニが使われえないのかの説明が必要だろう。

- (34) 本棚が田中 によって /\*に 作られた。  
 (35) デザートには、有名なパティシエ によって /\*に 焼かれたケーキをご用意しております。  
 (36) 源氏物語は紫式部 によって /\*に 書かれた。

産出動詞の場合であるが、二格にすると「本棚がYに作られた」では、Y項は本棚が据え付けられる場所に解釈されてしまい、「源氏物語はYに書かれた」では、Y項が書かれた場所あるいは「Yのために」というような意味に解釈されてしまうので、二格が避けられ、結果的に、動作主の意味ではニヨッテしか使えないという説明がひとまずできる。そもそも「田中が棚を作った」のような制作動詞の対象は、制作者によって働きかけられ変化するものという対象ではなく、制作行為によって生じるモノであり、普通の対象とは異質である。このような対象が受動化されたものは、非影響者を主体とする通常の直接受身文ではないのである。「棚が作られた」というような受身文では、モノの発生が語られているのである。ここで二格が使えないのは、非影響者(有情物)に視点を置いて、動作主に指向性を送る二格の規定に合致しないからである。また、「によって」が使われるのは、出来事の生起のもととなる起因としての「によって」の規定に合致するからである。厳密に言えば棚は出来事ではなく生じるモノであるので、「によって」は、「事物の発生のもととなるもの」をマークする複合辞と一般化できるであろう。

一方、感情などの能動主体の心的活動・態度を表す動詞の場合、能動主体を「によって」では表しにくい、としている(同2009:223)この場合、なぜニヨッテが使えないのか、説明が必要である。

- (37) 佐藤さんはご両親 ? によって に から 深く愛されている。  
 (38) 鈴木君は仲間 /\*によって に から 頼られている。  
 (39) 子ども /\*によって に から 甘えられるのはうれしいものだ。

これらは通常の直接受身と解釈されるので、二格が使えるが、「佐藤さんが深く愛されている」というのは、出来事の生起ともモノの発生とも解釈しがたいことが、「によって」が使われない理由であろう。

問題となるのは、下のように「に」も「によって」も使われる場合である。

(40) 留守番の主婦は 強盗 によって／に 殺された。

(41) その機器は出張の多いビジネスマン によって／に 利用されている。

竹林(2007)は、「によって」は、或る事態の成立が当該動作主に負うものであることを表すとし、非一般的な事柄(即ち、ありふれた出来事ではない事柄)の動作主として重要性を付与されている項目であるとしている。故に、「??太郎は先生によって褒められた」のように非一般的ではなくありふれた出来事には使えないとしている。これに関しては、「問題用紙が試験官によって配られた」のような例は、非一般的な出来事なのか判断に苦しむところである。試験で「問題用紙が配られる」のは、学校ではありふれた出来事ではないだろうか。また、(41)の例は、一般的な出来事であろう。単に、非一般的な出来事という規定ではこれは説明できないだろう。

ここでは、降格受動文の動作主がニヨッテ受身で表されるという益岡(1987)の規定が有効になるだろう。益岡は、受動文を、昇格受動文(二格受動文)と降格受動文(非二格受動文)に分け、降格受動文は、能動文の動作主を背景化することを動機とする受動文で、典型的には動作主はその存在が含意されるだけで表面には表われない。動作主を標示するためにはニではなく、ニヨッテが使われるとしている。降格受動文になれば、ニ受身ではなく、ニヨッテ受身になるわけだが、益岡は「に」も「によって」も使える場合の説明はしていない。

(40)で二格が使えるのは通常の直接受身文であるからであるが、同時にニヨッテも使えるのはなぜだろうか。「留守番の主婦が殺された」というような殺人事件は、まずは誰が殺したかわからないのが普通であろう。だから、動作主が背景化される降格受動文になる。つまり、「留守番の主婦が殺された」と動作主がなくても、ある出来事が起こったという受動文が成り立つのである。しかし、「太郎が褒められた」と言われても、普通誰がほめたか動作主が明らかにされないとひとつの出来事とは解釈しにくいであろう。つま

り、降格受動文が形成されないので「太郎が先生によって褒められた」というニヨッテ受身にはならない。

一方、「その機器は出張の多いビジネスマンに利用されている。」は、益岡は、属性叙述受動文として、降格受動文とはしていない。しかし、動作主を背景化した「その機器は関西地方ではよく利用されている。」というような降格受動文も可能である。ゆえに、ニヨッテが使えるのである。

この動作主を背景化するという点から、ニヨッテ受身は次のような認知過程が考えられる。ここでは、動作主が背景化されて、対象に認知主体の視点が置かれ、点線の出来事がひとまとまりの事態として認知される。動作主をここで再び前景化するには、有標のニヨッテが使われるわけである。

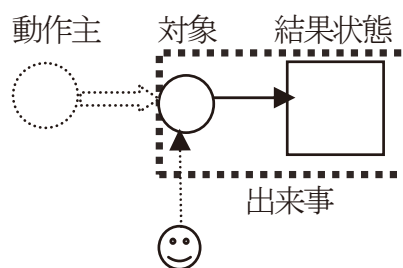


図9 降格受動文(ニヨッテ受身)の認知過程

以上、まとめると、ニ受身は、非影響者に視点を置いて、動作主に指向性を送るというスキーマを持つものであり、有情者が主体となる。(また、ニが場所の解釈を受けるものがある。)ニヨッテ受身は、事物の発生を表す非情物主体の受身であり、動作主が背景化される降格受動文である。ニヨッテは、事物の発生の起因を補助的に表す複合辞である。このような規定からニとニヨッテの違いを説明した。

## 6. 原因の二格

最後に「原因」をあらわすとされる二格について考えてみたい。

日本語記述文法研究会編(2009)では、「[に]」は、述語が感情・感覚を表す場合、その感情・感覚の生じる起因を表すほか、述語が継続する状態を表す場合、その原因となる自然現象を表す」としている。

(42) 職員の横柄な態度に腹を立てる。

(43) 昔、我が家には暖房設備がなく、冬は寒さに震える毎日だった。



(44) 潮風に帆が揺れていた。

本稿の解釈では、(42) のような感情・感覚の起因は、起因としても解釈されるが、対象に何らかの気持ちを向ける指向先とも解釈される。「私はこの店の味に魅了された」や、「花子にあこがれる」という二格と共通するものである。一方、(43) のような例は、「寒さに」が場所的に解釈されている。私が「寒さ」の中であって、影響を受けているというような解釈である。(44) も、「旗が風に吹かれている」のような受身の二格と同様、「潮風」という自然現象の中に「帆」があって、影響を受けているという解釈である。

山梨 (1993) も、次のような二格が<原因—場所格的>として、原因格と場所格の間で揺れると指摘している。

(45) 雨に濡れる木々の緑。

(46) テントの幕が風にはためく。

(47) 海浜の松が木枯らしに鳴り始めた。(以上山梨 1993)

(45) では、「雨」のために木々が濡れていると「原因格」に解釈できるが、一方で、木々が雨の中で濡れているという点で「場所格」にも解釈されるということである。このような例は、自然現象を表す文によくみられるが、ガ格名詞句が自然現象の中にあってそれに影響を受けているという「場所」的解釈が可能である。ここで、上記の例文は同じ場所格のデ格にも置き換えられるが、その違いについても一言触れておきたい。

(48) 昨夜の大雨 で/?に まだ地面が濡れている。  
(山田 2003)

山田 (2003) は、(48) において、「雨」が「地面が濡れている」という状態に併存する状況的物質であるときには二格の方がより自然に感じられるが、時間的に先行する原因であることが明白な場合は、同じ「雨」であっても二格はいいにくく感じられるという。これは二格の状況が、ガ格と時間的・場所的に一体化している制約から来るものであろう。デ格の状況は、その影響が残っている限りは、「地面が濡れている」という出来事自体の原因と解釈される点で異なるのである。

一般的な原因の二格の規定としては菅井 (2001) が参考になる。

(49) 次郎が弾丸に/?で 倒れる。

菅井は「二格」は主格 NP が一体化していく終点であることを示すので、「原因が主体と一体化するとの解釈が求められるときには「二格」で標示しなければならない」としている。(49) においては、「弾丸」によって「人」が「倒れた」という事象を描写するとき、原因の「弾丸」は、人体への「到着」ないし「密着」が想定されるので「二格」で標示されなければならない」と説明している。物理的には「人の中に弾丸があるのである」が、場所的解釈からいうと、「弾丸」が「人」に決定的な打撃を与える（「倒れる」「死ぬ」）ような影響力がある場合にのみ二格が使われるのであるから、力関係としては「弾丸」が「次郎」を包含する図式（「弾丸」⊃「次郎」）に解釈できると考えられる。このような原因の二格は場所の二格の特性を受け継いでいるのである。

## 7. まとめ

本稿では、二格のスキーマは、二格名詞句に対する指向性であるという位置づけを与えた。存在の場所は、認知主体が直接場所を指向するものであるが、着点では、ガ格（移動者）に視点が置かれ、そこから場所を指向するというものである。起点用法では、移動の方向性は逆になるが、やはりガ格（受益者、被影響者）から二格（与益者、動作主）への指向性が見られる。本稿では、この他に、受身では、二格が文字通りの場所として解釈される「場所の受け身」という類型をたてた。原因の二格の場合も、感情・感覚の起因のように、起因と解釈される二格名詞への経験主の指向性という観点から解釈されるものと、自然現象の二格のように、ガ格が二格に包含されるような場所的解釈を持つ二格があることを指摘した。

## 参考文献

- 岡 智之 (2005) 「場所的存在論による格助詞ニの統一的説明」『日本認知言語学会論文集』第5巻：pp12-22, 日本認知言語学会。
- 栗原由加 (2005) 「定位のための受身表現—非常物主語のニ受身文の一類型」『日本語文法』5巻2号, 日本語文法学会, くろしお出版。
- 菅井三実 (2005) 「格の体系的意味分析と分節機能」『認知言語学論考No.4』pp.95-131, ひつじ書房。
- (2007) 「格助詞「に」の統一的分析に向けた認知言

- 語学的アプローチ』『世界の日本語教育』17: pp113-135.
- 鈴木美加 (2007) 「によって—成果・影響・異なりの「もと」になるもの—」東京外国語大学留学生日本語教育センターグループKANAME編著『複合動詞がこれでわかる』ひつじ書房
- 竹林一志 (2007) 『「を」と「に」の謎を解く』笠間書院.
- 日本語記述文法研究会編 (2009) 『現代日本語文法② 第3部 格と構文 第4部 ヴォイス』くろしお出版.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版.
- (1991) 「受動表現と主観性」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版.
- (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版.
- 森 雄一 (1997) 「受動文の動作主マーカーとして用いられるカラについて」『茨城大学人文学部紀要人文学科論集』30: pp.83-99.
- 山田敏弘 (2003) 「起因を表す格助詞「に」「で」「から」』『岐阜大学国語国文学』: pp13-23.
- 山梨正明 (1993) 「格の複合スキーマモデル—格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」仁田義雄編『日本語の格をめぐって』: pp.39-65, くろしお出版.
- (1995) 『認知文法論』ひつじ書房.

## 注

- 1 認知主体の心的走査といえは、「鳥が飛んでいる」のような文ではガ格にも向かうであろうが、ここでいう指向性は基本的に場所に向けた指向性である。
- 2 認知言語学で「視線の移動」というとき、たとえば「ハイウェイが国境を越えて南に走っている」という場合、実際に「ハイウェイ」が移動している（「走っている」）のではなく、その情景を知覚している主体の視線が移動しているという意味で使われている。「外部世界の存在の物理的移動に関わる叙述が、外部世界の存在（ないしは情景）を知覚していく主体の視線の移動の世界に投影された表現とみなすことができる。」（山梨1995: 208）。すなわち、本来、移動の表現が、視線の移動と見なされ、情景の静的な描写に対して使われるのである。
- 3 二格をとる受動文には非情物が主体となる非情物の受身がある。  
あの絵が子供に引き裂かれた。

大切なお金が泥棒に盗まれた。

益岡 (1991) は、このような非情の受身は、「潜在的受影者」が関与するとした。すなわち、受動文の表面に表われることはないものの当該の事象からなんらかの影響を受ける有情者である。たとえば「鈴木さん」が潜在的受影者であるとする、それを顕在化させると有情の受身になるわけである。上記のような受身は、一種の持ち主の受身である。

鈴木さんは子供に絵を引き裂かれた。

鈴木さんは泥棒に大切な絵を引き裂かれた。

- 4 栗原 (2005) では、受け身文の二格項が「場」として表現されているこのような受け身を、ガ格項の位置を二格項の「場」に定めるという意味で、「定位」のための受身表現としている。その類型として、表れる類:「オーストラリアで見られるすべての景色が、この島に凝縮されています」、受ける類:「昔ながらの飛驒の風景が、白川郷に受け継がれています」、用いる類:「遣伝子組み換え大豆が、この豆腐に使用されています」をあげている。また、益岡 (2000) は、このような受身を属性叙述受動文の中に分類しているが、ガ格項が主題化される場合は、属性を表していると解釈されるが、主題化されていないものは、属性叙述ではないだろう。属性叙述を受動文の種類として設定するより、場所受身という受身の種類を設定した方がよいと思われる。
- 5 『華麗なる一族』は多くの中国人民に読まれています。  
益岡 (2000) は、このような受動文を属性叙述受動文と称し、「多くの中国の人民に読まれています」という叙述から「中国人民に人気がある」といった属性が含意されるとしている。また、複数主体でなくても「この論文はチョムスキーに数回引用された」のように、そのものが価値づけにふさわしい出来事により価値のある属性として叙述される場合は成り立つとしている。この場合は、むしろ、益岡が言う「潜在的受影者」が関与しているものではないだろうか。「彼の論文は、チョムスキーに数回引用された」つまり「彼は論文をチョムスキーに評価されている」のような持ち主の受身に近いものとして解釈しておきたい。
- 6 菅井 (2007) では、「ニヨッテ」は、<引き起こすもの>をコード化し、受動文全体が出来事の生起として把握されなければならないとしている。

# ニ格の起点用法について

—— 指向性からの説明 ——

## On a usage of Source in Japanese particle *Ni*

—— An account based on Directionality ——

岡 智 之\*

Tomoyuki OKA

留学生センター

### Abstract

The purpose of this paper is to account a usage of Source in Japanese particle *Ni* based on directionality.

Japanese postpositional particle *Ni* has many usages, such as 1) Place of existence (Locative marker), 2) Goal, 3) Recipient(Dative marker), 4) Source, 5) ‘Agent’ of Passive, 6) Cause, and so on. In the previous studies which try to give a unified account of *Ni*, Kunihiro shows that a semantic primitive of *Ni* is an ‘object of adhesion’, and Sugai who succeed to Kunihiro’s view, propose that a basic schema of *Ni* is a ‘Goal’. I also admit one of a main usage of *Ni* is a Goal, but I think their view has a problem. Because if a basic schema of *Ni* is a Goal, usage of Source, ‘Agent’ of Passive cannot be accounted coherently. That is, a usage of Goal has an unidirection from NP+*Ga*(Nominative) to NP+*Ni*(Goal), but a usage of Source has a contrary direction from NP+*Ni* to NP+*Ga*. To avoid this incoherence, I proposed that a basic schema of *Ni* is a directionality of conceptualizer(speaker) to NP+*Ni*.

That is, in the usage of Source, for example, ‘Jiro-ga Taro-ni hon-wo mora-tta.’(Jiro received a book from Taro), conceptualizer stands a view point of NP+*Ga*(beneficiary), and directs his gratitude to NP+*Ni*(giver). In a usage of ‘Agent’ of Passive, for example, ‘Taro-ga Hanako-ni tatak-are-ta.’(Taro was hit by Hanako.), conceptualizer stands a view point of NP+*Ga*(affected person), and directs some feeling to NP+*Ni*(Agent). In another passive sentence, for example, ‘Fujisan-no chojo-wa yuki-ni oow-are-teiru.’(Top of Mt.Fuji is covered with snow), NP+*Ni* is a place. I called this type of passive sentence Ni-passive for location. In a usage of Cause, for example, ‘Hata-ga kaze-ni huk-are-teiru.’(lit.Frag is blown by the wind), NP+*Ni* is also interpreted as place.

Key words: Japanese particle *Ni*, Source, directionality, place

*International Student Exchange Center, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 本稿の目的は、日本語の格助詞「に」のいわゆる起点用法について、指向性の観点から説明を与えようとするものである。ニ格の起点用法とは、受益文の「次郎は太郎に本をもらった」や、受身文の「太郎が花子にたたかれた」、原因の「彼の態度に腹を立てる」などのニ格の用法である。多くの先行研究のように、ニ格のスキーマ

を着点としてしまうと、これらの起点用法が説明がつかなくなってしまう。本稿では、これを概念化者の二格名詞句に対する指向性として説明した。受益文では、受益者から与益者へ、受身文では、被影響者から「動作主」へ、原因では、経験主から起因への指向性としてこれらの二格を説明した。この他に、受身文では「富士山の頂上は万年雪で覆われている」のようなガ格が二格に包含される、二格が文字通り場所として解釈される「場所受身」という類型を設定した。原因においても、「旗が風に吹かれている」のような自然現象では、二格名詞句が場所として解釈されることを指摘した。

キーワード: 格助詞「に」、起点、指向性、場所